

河合隼雄『コンプレックス』推薦のことば

「コンプレックス」というのは、「あの人はコンプレックスが強い」などと言われるように、世界中ではほぼ日常用語となっていて、特に劣等感と関係づけられることが多い。しかしコンプレックスは実はスイスの心理学者ユングによる専門用語である。本書は、言語連想検査を受けた人が、ことばを思いつくのに時間がかかったり、言ったことばを後から思い出せなかったりなどの反応の混乱を通して、ユングがコンプレックスの現象を明らかにしたことからはじまる。つまりコンプレックスとは、われわれの主体性を脅かすものなのである。そして職場の同僚の料理が得意な女性に対して強い嫌悪感を抱く中年女性の例が最初の方に挙げられているように、なんとなく嫌なまわりの人の特徴が、自分のコンプレックスに関係していることが多い。著者はこの女性のコンプレックスを仮に「料理コンプレックス」と名づけているが、お金、性、容貌、兄弟関係、父親、母親など、様々なものに対してのコンプレックスが存在する。

スイスでユング派分析家の資格をアジアで最初に 1965 年に取得した河合隼雄は、この岩波新書を 1971 年に 43 歳の時に出版して、一躍有名になる。この本が世に出てから既に 50 年以上になるが、毎年のように版を重ねて、昨年の 2024 年 10 月にも日本で第 71 刷りが発行されたようにいまだに非常にポピュラーで、内容的に古びてはいない。

その理由としては、この本は一般読者を対象にしている非常に読みやすいにもかかわらず、コンプレックスの解説にとどまらず、コンプレックスを手がかりとしてこころの深い所にまで導いてくれるからであろう。まずはコンプレックスの現象が、われわれの主体性を脅かすだけではなくて、時には二重人格のようにコンプレックスの方が主導してわれわれの主体性を乗っ取ってしまうようなこともあるような、コンプレックスの様々な現象が示される。しかしそれにはとどまらずに、どのようにしてコンプレックスを解消し、それを統合していくことが可能なのかを、いくつかの心理療法の例を元に示される。つまりコンプレックスについて客観的に知るだけではなくて、まさにコンプレックスを通して、読者が自分のこころを探り、深めていくように読めるのである。その際に心理療法からの多くの短い例が印象的である。本書は非常に読みやすいが、同時に心理療法を専門とする人にも参考になるレベルを有している。特に第 4 章のはじめの、母親からの自立をテーマにした中学生男子の事例は感動的である。

そこからさらに、本書は夢にコンプレックスが人の姿を借りて人格化されて登場することが多いので、夢とコンプレックスについての第 5 章を設けている。そこでの多くの夢の例はそれ自体非常に興味深く、また著者の論点に説得力を与えている。たとえば同性愛に悩んでいた男子高校生の見た夢で、自分の部屋が空っぽなのに対して、隣の友人の部屋には家具が一杯に並んでいて、その対照的な夢から友人の家庭の豊かさと、自分の家族関係のみじめさに思い至ることが示されている。またコンプレックスが個人を超えたところにまで及んでいることがあるので、ユングが個人を超えたところの層にあると考えた、イメージを生みだしていく元となるような元型とコンプレックスの関係についても最後の第 6 章で扱っている。つまり本書はコンプレックスを通してのユング心理学についてのすぐれた入門書ともなっている。

著者はコンプレックスが多層的であると指摘しているが、まさにこの本はコンプレック

スやそれに関連するユング心理学を知る本としても、自分のこころを深めていく本としても、専門家が心理療法について参考にする本としても読める多層的なものなのである。

河合俊雄（臨床心理学者・ユング派分析家）

（本推薦文は台湾で出版された繁体字中国語版《コンプレックス》に収録されたものです。）